

# 日中通訳初学者の逐次通訳における 起点言語理解の困難さ

—— M-GTA による分析から ——

晏 昭 平

## 1. はじめに

中国における日本語専攻設置大学は、2025年7月時点で493校に達している<sup>(1)</sup>。その多くの大学において、通訳の授業は主として3年次に配置され、授業内容も逐次通訳を中心としている。しかし、多くの中国語母語話者の日本語学習者は、大学入学後にはじめて体系的に日本語を学び始めるのが一般的である。入学後2年間の学習を経て一定の日本語基礎力を身につけているとはいえ、多くの学習者は依然として偏重バイリンガル (unbalanced bilingual, 不均衡バイリンガルとも呼ばれる) であり、母語の中国語が優勢な状態である。また、学習者間の日本語能力には大きな差が存在する。このような状況のもとで初級通訳教育を展開することは、多くの困難を伴うといえよう。

Gile (2009/2012) は、ヨーロッパの主要な通訳者養成機関では、通訳者養成と語学教育をはっきり区別しているが、学習者の作業言語の習熟度が十分でないため、通訳がうまくいかない事例も少なくないと指摘している。中国や日本はヨーロッパのようなバイリンガル社会ではないため、このような問題がより生じやすいと考えられる。

この問題を解決するために、通訳指導者の多くが語学力強化を目的とした、あるいはそれを兼ねた演習を授業に取り入れている (Gile, 2009/2012, p. 280)。しかし、二言語を母語として高度に習得しているバイリンガルであっても、必ずしも両言語間の通訳タスクを遂行できるとは限らない事実が示すように、語学力以外にも重要な影響要因が存在する可能性がある。

通訳という作業は言われたことをおうむ返しに異なる言語に変換するのではなく、通訳者自身がメッセージを解釈して、その意味を異なる言語で表現するのである (鳥飼, 2013, p. 2)。通訳における理解過程は、起点言語 (source language, 以下、SL) の内容をいかに解釈するかにか大きく依存し、その背景には文化や思考様式などの要素も関与している可能性がある。さらに、

通訳は「即時性」という特徴もある。そのため、通訳の理解過程は翻訳や読解などの言語理解とは大きく異なる。通訳では、時間をかけて訳すことはできず、短時間で耳にした情報を処理し、即座に訳出しなければならないため、高度な認知的スキルが必要である。

したがって、語学力を強化するだけでは、初学者が抱える理解上の困難を十分に克服することはできない可能性が高い。初級通訳教育においては、通訳課題の失敗を一律に語学力の不足に帰すのではなく、まず理解段階で生じる問題を特定し、その影響要因を詳細に検討したうえで、適切な通訳訓練法を導入することが求められる。そうした取り組みによって、偏重バイリンガルの通訳初学者も一般的な通訳課題を遂行できるようになるはずである。

したがって、どのような主要な要因が、そしてそれらの要因がどのように通訳の初学者の理解に影響を及ぼしているのかを明らかにすることが、通訳教育において最初に検討すべき重要な課題である。

## 2. 先行研究と本研究の位置づけ

通訳の理解過程に関する先行研究は、大きく二種類に分けられる。一つ目は、研究者や実務者が自身の教育経験や通訳実践経験を通じて得た知見を整理したものである。代表的なものとして、李 (2005)、盧 (2009)、Yenkimaleki & Heuven (2016) が挙げられる。

李 (2005) は、外在的制約 (時間的プレッシャー、情報密度、話者のアクセント等)、言語理解上の障害 (語彙の理解、文構造の理解、談話全体の理解等)、および非言語的知識 (世界知識、専門知識、文化的差異等) が通訳理解における制約要因であると論じている。盧 (2009) は、発音、語彙、文型、談話、さらに文化や思考の差異が理解に影響を及ぼすと指摘している。さらに Yenkimaleki & Heuven (2016) は、通訳における記憶負荷が情報のイメージ構築を阻害することを示し、教育的観点から作業記憶を強化する方策として、記憶方略やストーリー再生などの訓練を取り入れる必要性を提案している。これらの研究は、通訳理解に関わる多様な要因を提示し、その重要性を強調してきた。しかし、すべての要因を網羅的に明示できるか、また提示された要因の中でどれが主要な役割を果たすのかについては、未だ定説に至っていない。とくに初学者にとって主要となる影響要因については、さらに検討を深める必要がある。

二つ目は、実験データや通訳現場の記録をもとに行われた実証的研究である。たとえば、川端 (2016) は日中逐次通訳の音声进行分析し、SLの長さ、発話速度、語彙の難易度、テキストの予測可能性といったSL要因が訳出精度に大きな影響を与えることを指摘した。董 (2019) は、難易度の異なる三種類の講演材料を用い、フリーランス通訳者2名、企業内通訳者7名、大学院生通訳学習者19名を対象とする実験を実施した。その結果、逐次通訳か同時通訳かを問わず、材料の難易度が上昇するにつれて訳出率が低下することが確認された。また、Zhao et al. (2023) は、外国語能力、作業記憶の容量、そして不安の程度が通訳理解に影響を及ぼすことを指摘し

ている。こうした研究は、通訳の理解過程に影響を及ぼす要因の一部を示すとともに、通訳の複雑さをも浮き彫りにしている。しかし、これらの要因がもつ重要性が同程度のものなのか、あるいは決定的な役割を果たす特定の要因が何であるのかについては、いまなお明らかにされていない。

以上をふまえ、本研究は日中逐次通訳の初学者（以下、初学者）を対象とし、次の課題を明らかにすることを目的とする。第一に、初学者における SL 理解の現状を把握することである。第二に、初学者の理解過程に影響を及ぼす諸要因を検討し、その中で主要な要因を特定することである。これらの課題を明らかにすることによって、初級通訳教育において学習者が直面する理解上の困難をよりの確に捉えることが可能となり、効果的な指導法の構築に資することが期待される。

### 3. 研究方法

本研究ではまず参加者に通訳テストを実施し、その後、SL の音声および参加者の通訳音声を文字起こしする。両方の情報量を比較することによって、訳出率を算出する。訳出率の分析を通じて、初学者が、SL を理解する際の現状を明らかにする。

通訳の訳出に対する評価については、現時点では統一された基準は存在していない。しかし、その中で重要な参照基準となるのは、目標言語（target language, 以下、TL）の意味が正確であること、前後の論理が一貫していること、専門用語が適切であることである（Kurz, 1989; Marrone, 1993）。蔡・方（2003）は通訳品質評価の指標には、おおむね信頼性、受容性、簡潔性、多様性、迅速性、技術性などが含まれると指摘している。江（2017）は、国連の通訳評価基準は、完全性・正確性、語彙と音声の運用、統語と文体、マイクの使用習慣、さらには SL に関する知識などを含んでいると指摘している。これらの基準において中核をなすのは情報訳出の正確性および完全性、すなわち TL が正しく、かつ完全であるか否かである。TL の正確性と完全性を測定する重要な指標が訳出率（interpreting accuracy）である（Gieshoff & Albl-Mikasa, 2022）。訳出率には多様な要因が関与するが、SL の理解が不十分である場合、高い訳出率を達成することは困難であり、逆に理解度が向上すれば訳出率も相対的に上昇することは明らかである。したがって、本研究においては、初学者における SL 理解の程度を測定する指標として訳出率を採用する。

訳出率の算出方法についても、通訳研究において統一された基準はなく、具体的な計算方法を検討した研究も限られている。張（2018）と董（2019）は、TL において再現された SL の情報の割合を訳出率として扱っている。具体的には、まず SL の情報量を測定し、その後 TL で正確に再現された情報を数え、両者の比率を算出する。また、それぞれの情報がコミュニケーションにおいて果たす重要性が異なることから、情報を主要情報と副次情報に分類し、それぞ

れに異なる重要係数を設定する必要がある。董（2019）は、訳出率の算出式を具体的に以下のようまとめている。

$$\text{訳出率} = \frac{\text{TL 主要情報} \times 1 + \text{TL 副次情報} \times 0.5}{\text{SL 主要情報} \times 1 + \text{SL 副次情報} \times 0.5}$$

董（2019）が日本語から中国語への通訳における訳出率を検討した点は、本研究の条件と一致するため、本研究でも同様の方法を用いて訳出率を算出する。情報単位の設定について董（2019）は、並列した主語・目的語、単文、接続詞、副詞、複文中の修飾部分、時間や場所を表す節をそれぞれ一つの情報として扱っている。一方、張（2018）は命題およびモダリティを一つの情報として扱った。通訳の目的は SL の語彙などを忠実に再現することではなく、SL の意味を伝え、コミュニケーションを促進することである。そのため、本研究では命題およびモダリティを一つの情報として扱う。すなわち、文において出来事を描写する部分を命題、出来事に対する話者の主観を表す部分をモダリティと定義する（庵, 2001, p.72）。さらに、文の間の接続詞や接続機能を果たす要素は SL の一貫性理解に関連することから、これも SL の一つの情報単位として扱う。本研究における原文情報量の算出は、以上の方針に基づき以下の方程式でまとめられる。

$$\text{SL の情報量} = \text{命題} + \text{モダリティ} + \text{接続部分}$$

次に、通訳テストの一部参加者に対して半構造化インタビューを行う。先行研究の多くは、研究者自身の教育経験に基づき影響要因をまとめている（李, 2005；盧, 2009など）。それらは一部の要因を取り上げてはいるが、学習者の実感への関心が十分ではなかった。そのため、インタビュー法を用いることにより、初学者自身の視点から通訳理解に影響する多様な要因を包括的に整理することができ、さらに複数の参加者から繰り返し言及された要因を主要な影響因子とみなすことが可能となる。

そして、参加者の録音を文字化した上で、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach, 以下、M-GTA）を用いてデータを分析し、初学者の SL 理解に影響を及ぼす要因を抽出する。M-GTA について、次のような指摘がある。

M-GTA はインタビューデータの使用に適した質的研究法であり、理論、すなわち、人間行動の説明モデルの生成を目的とする。単に質的データの分析だけを目的とするのではなく、またデータのシステムティックな処理よりも解釈に重点をおく質的研究法とも異なり、両者を統合することでこの目的を達成しようとする。そして、データに密着した分析から独自に生成される理論という明確な結果像を設定している。（木下, 2020, p.62）。

本研究が注目するのは初学者における通訳理解の過程であり、通訳理解に影響を及ぼす要因を可能な限り明らかにすることを目的としている。この目的に鑑み、データ分析にはM-GTAを用いることが適切であると判断した。

## 4. 通訳テスト

### 4. 1 通訳テスト参加者

本研究では、中国の大学に在籍する日本語専攻3年生54名を対象とした。そのうち、男子が9名、女子が45名であり、平均年齢は20.2歳であった。日本語学習歴に関しては、47名が大学から日本語学習を開始し、7名が高校2年次より学習を開始しており、平均日本語学習年数は2.2年であった。なお、9名の参加者は日本語能力試験（Japanese-Language Proficiency Test、略称JLPT）N1に合格しており、平均得点は131.7点であった（満点180点、合格基準100点）。その他の参加者の大多数は同試験を未受験であった。また、全参加者が中国における日本語専攻生四級試験（NSS-4）<sup>(2)</sup>を受験しており、その平均得点は70.4点であり、合格者の割合は64%であり、最高点は105点、最低点は39点であった（満点110点、合格基準66点、全国の合格率35.76%、全国の平均得点60.29点）。標準偏差（Standard Deviation, SD）は14.29であり、NSS-4成績のばらつきが比較的大きいことを示している。これらの結果から、参加者の多くは基礎的な日本語能力を一定程度有している一方で、語学力の差が存在することが確認された。

NSS-4は、中国における基礎段階の日本語教育の成果を測る試験として実施され、現在では中国の日本語教育界における主要な評価基準の一つとして広く認識されつつある（譚・楊, 2017）。その難易度は、日本語能力試験のN2程度に相当するとされる（石・康, 2023）。両試験は内容や形式に大きな違いがあるが、NSS-4合格者とN2合格者の日本語能力は概ね中級レベルに達していると考えられる。本研究の参加者のうち64%がNSS-4に合格したため、参加者の日本語能力は中級レベルに位置づけられる。

参加者の募集の時点で、参加者は新学期開始後、計8回の通訳授業（1学期16回、各90分）を受講しており、いずれの参加者も学期開始以前には大学やその他の教育機関で通訳訓練を受けた経験がなく、すべて通訳の初学者である。

### 4. 2 通訳材料

参加者の日本語能力が中級であることを考慮し、通訳材料のテーマや難易度はそのレベルに適合するように設定する必要がある。本研究に使用する通訳材料は令和6年度第20回恵那市少年の主張大会において奨励賞を授与された中学生のスピーチである。スピーチの長さは5分（1,430字）である。SLの話題親密度の観点から、難易度の高くないSLとして大学生が精通している「言葉の選択」に関するスピーチを選定した。主な内容は、講演者自身が相手に嫌言

葉を言わないように日常生活で使う言葉をよく考えているという話である。

日本語の逐次通訳については、小松（2005）はセグメントの長さについて慣行は20秒から1分以内であると述べた。本研究でも20秒から1分間を目安に、意味のまとまった個所を区切りとして、通訳材料のセグメントを分割した。その結果は表1のとおりである。

表1 通訳材料のセグメント分割

セグメント	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
秒数	20	24	42	40	40	35	40	40

訳出率は通訳材料の難易度に大きく影響されるため、参加者の日本語能力を中級程度に想定し、通訳材料も中程度の難易度に設定する必要がある。董（2019）は、日本語文章難易度、話速、情報密度の三つの観点から通訳材料の難易度を総合的に評価している。文章の難易度は、原文を jReadability<sup>(3)</sup> に入力することでシステムが自動判定する。話速は「セグメントのモーラ数÷秒数」、情報密度は「セグメントの情報数÷秒数」により算出する。この方法により、通訳材料の難易度を包括的に把握できることから、本研究でも同様の方法で通訳材料の評価を行った。具体的な評価結果は以下の通りである。

まず文章の難易度について、jReadability は語彙や文法などの要素に基づき、学習者の視点から日本語の文章の難易度を判定する。次の図1に示すように、本研究で使用した通訳材料の文章難易度は中級前半（ふつう）である。

テキストの概要	
総形態素数（異）を表示するには「語彙リストを出力」をオンに	
文章難易度 <sup>*注</sup>	中級前半 ふつう
リーダビリティ・スコア	3.72
総文数	42
総形態素数（延）	911
総形態素数（異）	243
総文字数（記号・空白を含む）	1445
一文の平均語数	21.69

\* 判定は日本語学習者にとってのむずかしさです。母語話者を想定したものではありません。

図1 通訳材料全体の文章難易度<sup>(4)</sup>

さらに、各セグメントの文章難易度は表2のとおりである。

表2 各セグメントの文章難易度

セグメント	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
難易度	中級前半	中級前半	中級後半	中級前半	中級前半	中級後半	中級前半	中級前半

セグメント③とセグメント⑥は中級後半に該当する。しかし、その他の6つのセグメントはすべて中級前半に分類される。したがって、各セグメント間の難易度は概ね均衡していると考えられる。このことから、本研究で用いた通訳材料の文章難易度は中級であると判定した。

次に話速についてである。その結果は表3に示す通りである。

表3 通訳材料の話速

セグメント	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
モーラ数	109	148	252	231	238	211	233	208
秒数	20	24	42	40	40	35	40	40
モーラ/秒	5.5	6.2	6.0	5.8	6.0	6.0	5.8	5.2
		平均話速 5.8モーラ/秒						

杉藤(1999)によると、比較的速く話すアナウンサーのテレビニュースにおける平均発話速度は9.5モーラ/秒である。これに対し、本材料の平均発話速度は、5.8モーラ/秒であり、中級レベルの速さだと言える。

最後に情報密度についてである。結果は表4に示す通りである。

表4 通訳材料の情報密度

セグメント	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
情報数	4	9	13	10	8	7	13	11
秒数	20	24	42	40	40	35	40	40
情報密度	13.3	22.5	18.6	14.3	11.4	11.7	18.6	15.7
		平均情報密度 16.5情報数/分						

董(2019)が同様の方法で算出した結果によれば、低難易度材料の情報密度は15.5情報数/分、中難易度材料は18.6情報数/分、高難易度材料は21.8情報数/分であった。本研究で使用した材料の情報密度は16.5情報数/分であり、低難易度と中難易度の中間に位置するといえる。

以上の文章難易度、話速、情報密度による通訳材料の総合的な評価から、本研究で使用した通訳材料の難易度は中級であり、中程度の日本語能力を有する参加者に適しているといえる。

### 4. 3 通訳テストの実施

通訳においては事前準備 (previous preparation) が重要であり、十分な事前準備を行うことで通訳のパフォーマンスが向上することが指摘されている (Galaz et al., 2015; Fantinuoli, 2017)。事前準備の方法としては、用語集の作成、依頼者との打ち合わせ、関連映像の視聴や関連分野の情報収集などが挙げられる (Strekalovskaya, 2020)。

本研究では、参加者が事前準備を行えるよう、テスト前日に通訳内容に関するテーマを知らせ、あわせて「パーキンソン病」や「誹謗中傷」といった、日常的な学習範囲を超える難易度の高い語彙を提示した。テスト当日、全参加者は通訳教室に集合し、統一形式でテストを実施した。記憶負荷を軽減するため、事前に提示した語彙は常時パソコン画面に表示した。

テストが開始されると、まず SL 開始を知らせる合図音が流れ、その後セグメント①の日本語音声再生された。再生が終了すると終了を示す合図音が鳴り、約 2 秒後に通訳開始の合図音が流れた。訳出の時間は、各セグメントの再生時間の約 1.5 倍に設定された。このプロセスは 8 つのセグメントすべてが終了するまで繰り返された。

### 4. 4 通訳テストの結果

以上の手順により、全体の訳出率および各セグメントの訳出率を算出した。結果は表 5 に示すとおりである。平均訳出率は 21.31% であり、最も高い訳出率を示したのはセグメント⑥の 36.65% であった。一方、最も低い訳出率を示したのはセグメント②であり、9.07% にとどまった。標準偏差 (Standard Deviation, SD) は 19.56 である。これは、参加者の全体的な訳出率が低く、SL 全体の理解度が十分でないことを示しており、特定のセグメントではその傾向が特に顕著である。また、各セグメントの標準偏差が大きいことから、参加者間の SL の理解度には大きな個人差があることがうかがえる。

表 5 通訳材料の訳出率

セグメント	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	全体
訳出率	23.81%	9.07%	11.70%	18.00%	23.01%	36.65%	28.16%	20.08%	21.31%
	(SD= 19.67)	(SD= 12.43)	(SD= 16.55)	(SD= 21.07)	(SD= 25.11)	(SD= 21.95)	(SD= 24.20)	(SD= 15.47)	(SD= 19.56)

参加者ごとの訳出率を算出した結果は図 2 である。参加者の中で最も高い訳出率は 57.14%、最も低いのは 1.19% であり、全体の平均は 20.50% であった。標準偏差は 15.58 であり、参加者間における訳出率のばらつきが比較的大きいことを示している。

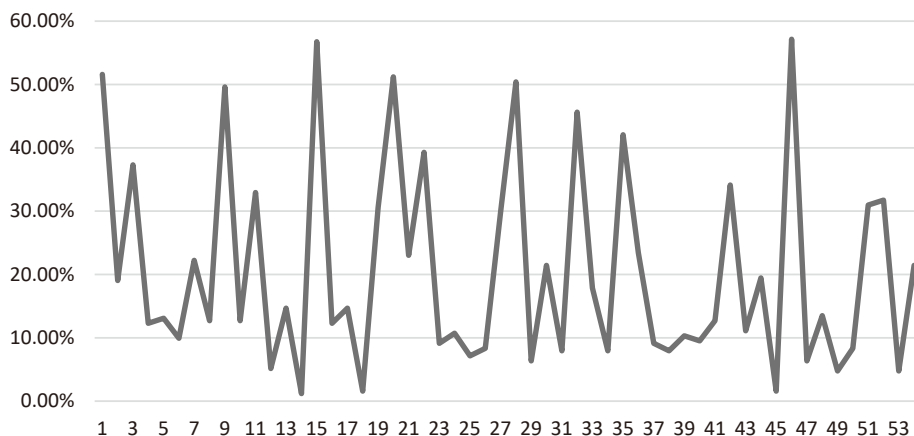


図2 参加者の訳出率

図3は参加者の訳出率の分布を示した箱ひげ図である。中央値は約13%付近に位置しており、参加者の半数がこの水準以下の訳出率にとどまっていることが分かる。第1四分位点は約10%、第3四分位点は約30%に位置しており、四分位範囲（IQR）はおよそ20ポイントに及ぶ。このことは、全体の50%の参加者の訳出率が10%から30%の範囲に分布しており、比較的広くばらついていることを示している。さらに、箱体の上端は約60%に達しており、一部の参加者が平均を大きく上回る高い訳出率を記録したことが示唆される。平均値は中央値よりもやや高く分布に正の歪度が存在するため、少数の高得点者が全体平均を押し上げていると考えられる。以上の結果から、参加者全体としては訳出率が低水準に集中しつつも、参加者の間の差が顕著であることが明らかとなった。

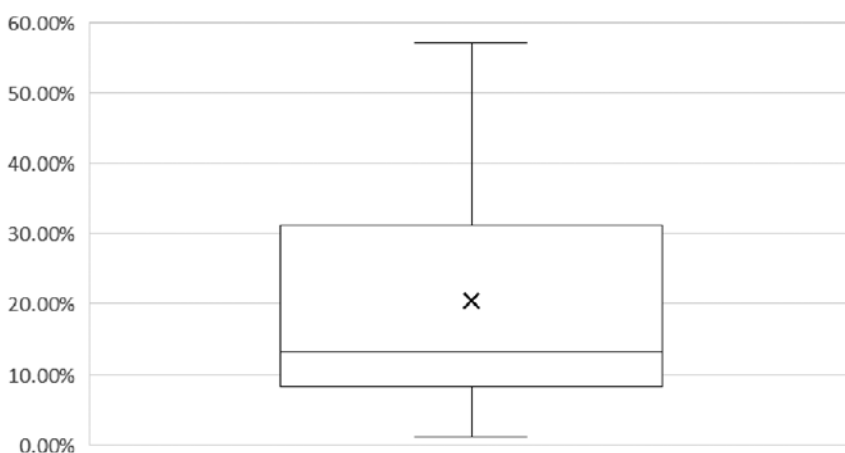


図3 参加者の訳出率の箱ひげ図

#### 4. 5 通訳テストの考察

参加者の平均訳出率および通訳材料全体の訳出率はいずれも約20%にとどまっており、参加者の通訳パフォーマンスが必ずしも良好ではなく、SLの理解において大きな問題を抱えていることが示唆される。参加者の日本語成績（NSS-4）には大きな差（ $SD=14.29$ ）が見られ、その差異が通訳の訳出率に影響を及ぼし、今回の通訳テストにおける訳出率の大きな開き（ $SD=15.58$ ）につながった可能性がある。それを検証するために、NSS-4と訳出率との相関分析を行った。結果は表6に示すとおりである。

表6 日本語成績（NSS-4）、訳出率の相関統計

	平均値 ( $M$ )	標準偏差 ( $SD$ )	相関係数 ( $r$ )
1. NSS-4	70.4	14.29	—
2. 訳出率	20.50	15.58	0.486 ( $p < 0.001$ )

表6から、日本語成績と訳出率の得点間には、 $r=0.486$ と中程度の相関があり、1%水準で有意であることがわかった。この結果は、日本語成績が高い参加者ほど通訳テストにおける訳出率も高い傾向にあることを示している。すなわち、現段階では参加者の日本語能力が通訳遂行の成否に影響を及ぼす要因の一つであることが実証された。

さらに、回帰分析の結果、日本語成績は訳出率を有意に予測することが明らかとなった（回帰係数=0.439,  $p < .001$ ）。決定係数は $R^2=0.236$ であり、訳出率の分散のおよそ23.6%を日本語成績が説明していた。訳出率と日本語成績には中程度の相関が認められるが、残りのおよそ76%の分散は他の要因によって説明されると考えられる。以上の結果から、日本語能力以外にも重要な影響要因が存在することは否定できない。

通訳材料を具体的に分析してみると、セグメント③およびセグメント⑥は文章難易度が中級後半に位置づけられる部分であり、他のセグメントよりも文章難易度が高いと判断される。しかし、訳出率が必ずしも低いわけではなく、特にセグメント⑥の訳出率は36.65%に達し、全セグメント中で最も高い値を示した。本研究における通訳材料の文章難易度は、主としてテキストに含まれる語彙構成や文の長さといった要素に基づいて判断したものである。以上の結果から、SLの語彙が難解であるほど、あるいは文が長いほど訳出率が低下するとは必ずしも言えず、SL要因が通訳に及ぼす影響のメカニズムについては、さらに詳細な検討が求められる。

#### 5. 半構造化インタビュー

訳出率に基づく分析の結果、初学者によるSL理解に影響を及ぼす要因の一端が明らかとなった。しかし、先行研究と同様に、これまでの分析においても初学者の通訳理解の影響要因を全

体的に把握することはできない。また抽出された要因が主要因であるか否かを断定することも難しい。こうした状況においては、理解をより深めるために質的研究の枠組みを導入することが有効であると考えられる (Corbin & Strauss, 2008/2015, p. 28)。質的調査は、参加者が直面する困難や課題、学習上の工夫などを本人の語りから抽出することにより、量的結果の解釈を補完し、解釈の多層化を図る上で有効である。したがって、本研究では参加者への半構造化インタビューを実施し、そのデータに基づいて分析を行う。

## 5. 1 インタビューの実施

通訳テスト終了直後に半構造化面接法による個別面接調査を実施した。そして、インタビューを行いながら逐次データを分析した。その結果、17名の参加者を対象とした時点で理論的飽和化になったと判断した。17名の参加者のうち、訳出率が20%未満の者が6名、20%から40%の範囲に属する者が5名、40%から60%に属する者が6名である。一人あたりの面接時間はおおむね50分前後であった。参加者が通訳過程において直面した困難や、それに対してどのような工夫や努力を行ったのかを明らかにするために、事前にインタビューガイドを作成した。インタビューガイドは、リスニングと分析の段階における困難、訳出段階における困難、理解が困難であった箇所や状況、理解できなかった場合の対処方法、練習時の良かった点、さらに今後の改善の方向性などである。

インタビューに先立ち、参加者には通訳テスト時の自らの録音を聴取させ、当時の状況をより鮮明に想起できるよう配慮した。また、インタビュー中には、参加者が通訳実施時に作成したメモを参照することを認め、発話内容の想起を補助した。なお、インタビューはすべて中国語で実施され、記録を逐語的に文字化した後、日本語に翻訳した。翻訳後の総字数は82,108字に達した。

## 5. 2 インタビューデータの分析

本研究におけるインタビューデータの分析にはM-GTA (修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ) を用いた。木下 (2020) はM-GTA は grounded-on-data の分析原則に基づいてインタビューデータから直接概念を生成し、一つ一つの概念ごとにワークシートを作成し、概念の比較からカテゴリーを生成し、最後は結果図とストーリーラインを作成すると指摘している。

本研究で設定した分析テーマは「日中通訳初学者における SL 理解のプロセス」であり、分析の焦点者は「日中逐次通訳の初学者」とした。なお、分析作業の過程で作成したワークシートの一例を表7に示す。

表7 ワークシート例

概念	心理状態
定義	心理的状态による影響
バリエーション (具体例)	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 集中力があまり続かないタイプなんです。普段、人と会話していても、興味がある部分だけを聞いて、興味がないところは完全にスルーしています。「聞いているふり」をしながら、実際には一言も頭に入っていないことがよくあって、無意識に聞き流してしまう癖があります。【T2：41】</li> <li>● 聞いているときにちょっとでも緊張したりすると、わーって一気に内容が抜け落ちてしまって、全部飛んじゃう感じでした。【T5：3】</li> <li>● 自分でもなぜかは分からないんですけど、ちゃんと聞いているつもりなのに、ある瞬間にふっと集中が切れてしまうんです。【T9：38】</li> <li>● 普段からあまり長い音声を聞き慣れていないので、一気にこれだけ長く話されると、「訳さなきゃ」というプレッシャーが強くて、心に余裕がなくなってしまいます。【T10：34】</li> <li>● 例えば、前の文を聞いているとき、「あ、これ訳さなきゃ」って気持ちになって、緊張して焦ります。そして知らない単語が出てきたら、「あれ。これどういう意味だろう」って考え始めました。その単語がわからないと、「この文全体の意味は何だろう」ってまた考えますよね。そうやって考えてるうちに、次の文がもう始まって、気づいたら聞き逃してるんです。【T13：46】</li> <li>● 最初の段階では緊張もあって、冒頭部分は特にうまく聞き取れなかったのも原因のひとつだと思います。当時は何をすべきか分からない状態でした。【T15：2】</li> </ul> <p>……</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 精神的なプレッシャーが聴取と理解に影響を与える。</li> <li>● 分からなくて訳出できないから緊張するのではないか。</li> </ul>

### 5. 3 インタビューの考察

次の表8のとおり、13個の概念、4個のカテゴリーを生成した。

本研究では、252箇所の子重復的なインタビューデータの具体例から概念を生成した。その内訳は、言語的要因に関する具体例が135箇所、通訳作業上の要因に関する具体例が70箇所、認知的要因に関する具体例が45箇所、外的要因に関する具体例が2箇所であった。

インタビューデータから、初学者のSL理解に影響を及ぼす要因は、大きく言語的要因、認知的要因、通訳作業上の要因、外的要因の四つに分類できることが明らかとなった。なかでも、インタビューの参加者が最も頻繁に言及した理解上の障害は言語的要因であり、次いで通訳作業上の要因、認知的要因、外的要因の順であった。

さらに言語的要因に着目すると、最も多く言及されたのは「談話の影響」(53具体例)と「語彙の影響」(51具体例)であった。これら二つは、本研究で抽出された全概念の中でも最も多くの具体例を伴う要因である。とりわけ談話の影響に関しては、「文の論理的関係を誤って理解した」という報告が25事例に上り、次いで「文の意味理解が不十分であった」が16事例、「主題が

表8 カテゴリー・概念一覧

カテゴリー	概念
言語的要因	発音の影響（具体例：4）
	語彙の影響（具体例：51）
	文法の影響（具体例：27）
	談話の影響（具体例：53）
認知的要因	心理状態（具体例：12）
	個人認知（具体例：2）
	認知資源の配分（具体例：31）
通訳作業上の要因	ノートテイキングの影響（具体例：39）
	言語変換の影響（具体例：11）
	記憶の影響（具体例：16）
	聴解練習の影響（具体例：4）
外的要因	設備の影響（具体例：1）
	他人からの影響（具体例：1）

把握できなかった」が8事例であった。談話（discourse, ディスコースとも呼ばれる）の定義については現在も一定の議論が存在するが、本研究の中心的課題ではないため、ここでは代表的な定義のみを挙げるにとどめる。まず、談話とは「まとまりのある意味をもち、文より大きな言語単位である」とされる（宮, 2024）。また、談話には一貫性がある。一貫性とは、談話の深層に存在する無形の論理的ネットワークであり、これによって談話全体が一つの意味的統合体として成立する（魯・彭, 2003: 52）。さらに、談話の一貫性にはローカル一貫性（local coherence）とグローバル一貫性（global coherence）がある（董, 2005: 86）。ここで、文の論理的関係の理解はローカル一貫性（local coherence）を、主題の理解はグローバル一貫性（global coherence）を反映すると考えられる。このことから、ローカル一貫性とグローバル一貫性の双方を含む談話の一貫性の理解が、初学者のSL理解を制約する主要な要因であることが示唆される。

実際、ある参加者は次のように述べている。「聞いていて、この数文がつながっている感じがしませんでした」【T14: 23】。このように、聞き取った文を一貫した意味として結び付けられない学習者は少なくない。また、ある参加者は「登場人物同士の関係性や、そのやり取りの中でどういう関連があるのかもあまり理解できませんでした。そのため、通訳の際に、発話の中に重要な言葉があるのは分かっても、それがどんな役割を果たしているのか即座に判断できず、結果としてどう訳せばいいか分からなくなっていました」【T15: 25】と述べている。この発言からも明らかなように、一部の情報を聞き取れていても、それらの関係性を適切に理解できなければ通訳が失敗に至る可能性が高い。

次に、語彙の影響に関する分析では、初学者が最も頻繁に指摘した困難は「単語の意味を即

座に想起できない」という問題であり、その具体例は23件に上った。実際、ある参加者は次のように述べている。「あまり聞いたことがないような単語、普段あまり使われないような単語だと、ぱっと聞いてもすぐには反応できません」【T3：11】。この発言が示すように、通訳初学者は日本語学習歴が比較的小さいため、自らが即時的に運用可能な語彙の範囲が限定されており、その結果、通訳の初期段階では単語の処理に長い反応時間を要する場面が少なくない。

さらに注意すべきところは、語彙の理解が他の要因と相互に作用し、初学者の理解過程に影響を及ぼしていることである。たとえば、初学者が指摘した「名詞や動詞といった内容語に注意を向けて聞き取り、記憶はできても、それらを結び付けて文全体として理解できない」という問題は、具体的に12件報告されている。実際、ある参加者は次のように述べている。「この部分を聞いていたときは、文全体の意味のつながりというより、名詞や形容動詞といったキーワードの表面的な意味にばかり注意が向いていて、前後の意味の関係までは意識が回っていません」といいます【T1：19】。

したがって、言語的要因がSL理解の主要な影響要因であるが、語彙や文法などの影響は限定的であり、初学者が理解上最も大きな困難を示すのは、むしろ談話レベルにおける結束性・一貫性の把握であることが示唆される。

言語的要因のほかに、最も多く言及されたのはノートテイキングの影響であり、具体例は39件に上った。その中でも「通訳ノートの取り方が分からない」という指摘が20件、「自分のノートが読めない」という指摘が14件あった。ある参加者は次のように述べている。「まず聞いて、大事な単語が出てきたらすぐ書き始めました。でも、自分の書くスピードが話のスピードについていけなくて、書いている間に後の内容がどんどん流れていって、書き終わったときには一段落が終わっていて、もう何を言っていたのか分からなくなっていました」【T4：3】。この発言に示されるように、多くの初学者は聞き取った内容を可能な限りすべて記録しようとする傾向がある。しかし、ノートの記録速度はSLの進行速度に追いつかず、また通訳ノートは速記ではないため、SLの全情報を逐一記録することは現実的にも理論的にも不可能であり、必ずしも必要でもない。

さらに、ノートテイキングもまた相互に作用する要素の一つである。ある参加者は次のように述べている。「最初のころはノートに頼ろうとしていて、ノートの比重がかなり大きかったと思います。短期記憶に頼る部分はほとんどなかったですね。でも、ノートだけではやはり不十分で、たとえば一つの部分を書き終わらないうちに次の話が始まってしまい、書ききれなくなるんです。そのうえ、短期記憶もうまく働いていなかったのでも、その部分の通訳は結局うまくいきませんでした」【T1：5】。実際、多くの情報がノートには残されているにもかかわらず、発話の意味が十分に理解できていないことも少なくない。これは、初学者が限られた処理容量（processing capacity；注意資源 attentional resource とも呼ばれる）をノートテイキングに過度に分配することで、語彙・文法・談話といった理解や記憶に必要な処理容量が不足していることを

意味している。

したがって、言語的要因に加えて、通訳作業上の要因、認知的要因も、初学者の理解過程に影響を及ぼす重要な要素であると言える。また、参加者へのインタビュー結果からも明らかのように、これらの要因は個別に存在しているのではなく、相互に関連しながら初学者の理解に作用している。とりわけ主要な影響要因である言語的要因については、談話全体の把握が不十分であるという形で顕在化するが、その背景には、一部の語彙や文法といった言語面の制約に加え、ノートテイキングなどの通訳作業上の要因、処理容量などの認知的要因が総合的に的に影響していることが確認できる。

#### 5. 4 インタビューの結果

以上の分析とインタビューデータに基づき、本研究では図4に示す結果を得た。

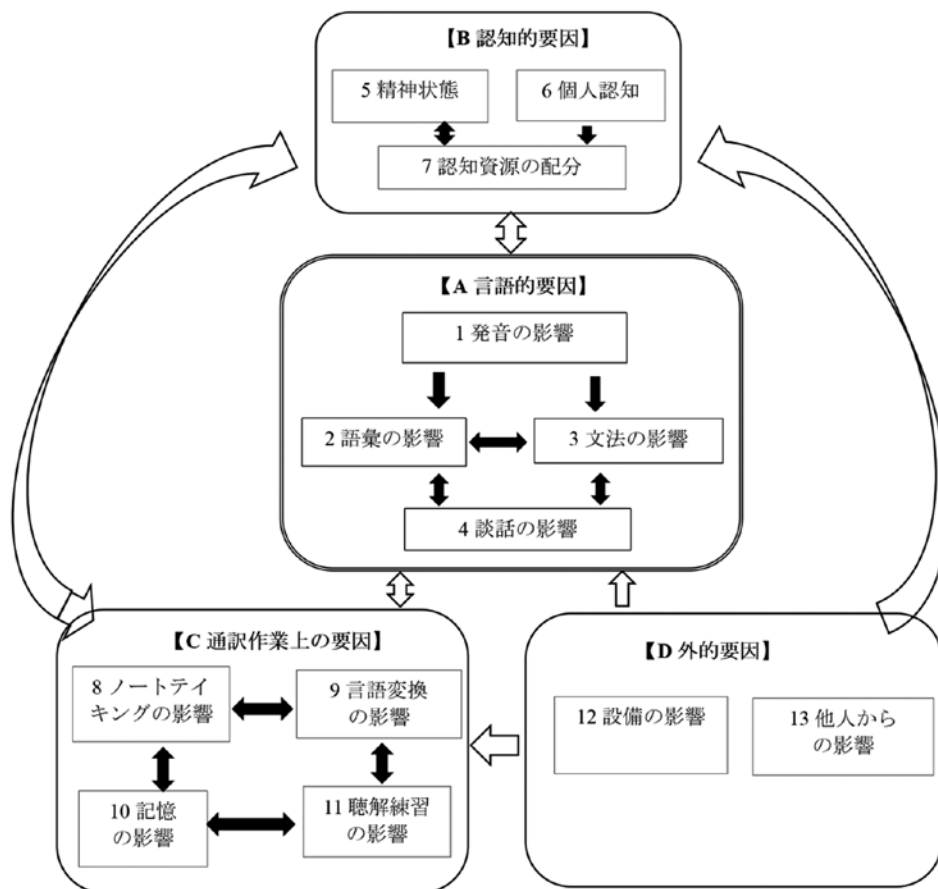


図4 インタビューの結果図

ストーリーラインをまとめると、以下のとおりである（〔 〕は概念であり、【 】はカテゴリである）。

通訳の理解段階において、初学者はまず〔語彙〕、〔発音〕、〔文法〕、〔心理状態〕、さらには【外的要因】といった複数の要因が相互に作用することにより、文全体の意味を十分に把握できない傾向がみられる。さらに、内容語の処理や〔ノートテイキング〕、リスニングといった特定の側面に過度の注意を向ける結果、処理容量が飽和状態に達し、〔記憶〕保持、〔言語変換〕、文の間の論理的関係の理解に必要な処理容量が不足することになる。SLの一貫性に対する理解が不十分となるのである。

## 6. 教育的示唆

まず、参加者の訳出率を分析した結果、初学者の訳出率は日本語能力の制約を受けていることが明らかとなった。その際、SLの語彙の難易度や文の長さといった要素は決定的な影響因子ではないことが示唆された。さらに、インタビューの結果から明らかになったのは、参加者がSLを理解する際の最大の障害が、談話の一貫性を十分に理解できない点にあるということである。そして、この困難は言語的要因、通訳作業上の要因、認知的要因、外的要因とが複合的に作用することで生じている。

したがって、初級通訳教育では、語彙や文法といった言語的要素は談話理解を妨げる原因の一部にすぎず、むしろそれらと他の要因が重なり合うことで処理容量が不足しやすくなる点に注意を向ける必要がある。

授業の実践においては、まず初学者が談話全体の意味やつながりを捉える力を養うために、談話の一貫性に焦点を当てた訓練を導入することが必要である。

次に、ノートテイキングや注意の配分といった要因も理解過程に影響を及ぼすことから、初級通訳教育においては、通訳技能訓練を行う必要もある。これにより、初学者の通訳作業に対する熟達度を高めるとともに、認知負荷を適切に管理する能力の向上が期待できる。

しかし、前述したように、談話理解の不足は、単なる言語的要因だけでなく、通訳作業や外的要因などが複合的に関与して生じるものである。そのため、談話の一貫性を理解する訓練は、通訳技能訓練と組み合わせて行うことで、初学者が直面する理解上の困難をより効果的に克服できると考えられる。

## 7. おわりに

本論文では、日中通訳初学者のSL理解を妨げる多様な要因を検討した。その結果、初学者の通訳理解は言語的要因、通訳作業上の要因、認知的要因、さらには外的要因に影響されるこ

とが明らかとなった。とりわけ重要なのは、複数の要因が重なり合うことで生じる言語的要因の一部、すなわち談話の一貫性理解の不足である。したがって、学士課程での日中逐次通訳の授業においては、通訳技能訓練に談話の一貫性を理解する訓練を取り入れる必要がある。

しかし、訓練の具体的な展開方法や、その訓練法がどのような成果をもたらすのかについては、依然として十分に解明されていない。これらは今後の課題として、さらに検討する。

#### 【注】

- (1) 中国教育部「阳光高考网 <https://gaokao.chsi.com.cn/zyk/zybk/ksyxPage?specId=733835071>」(2025年8月5日更新)
- (2) 日本語専攻生四級試験は、中国の大学における日本語専攻学生を対象とした総合的能力評価試験であり、学習者の「聞く・話す・読む・書く・訳す」といった言語運用能力を多面的に測定することを目的としている。試験内容は、聴解、語彙、文法、読解、作文などの設問形式から構成される。本試験は、日本語専攻2年次の課程終了時に実施され、毎年6月に全国统一で行われる。出題および実施は中国教育部大学外国語指導委員会日本語分科会が担当している。
- (3) 本システムは、研究代表者である早稲田大学の李在鎬らにより、日本学術振興会科学研究費補助金(課題番号25370573)を受けて開発されたオンラインシステムである。日本語学習者にとっての文章難易度は、平均文長、漢語率、和語率、動詞率、助詞率に基づき判断される。<https://jreadability.net/ja/>
- (4) 本研究における図1は、日本語文章難易度判定システムによって生成したものであり、その他の図および表はすべて筆者自身が作成したものである。

#### 【参考文献】

##### 和文文献

- 庵功雄 (2001) 『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』 スリーエーネットワーク.
- 木下康仁 (2020) 『定本 M-GTA 一実践の理論化を目指す質的研究方法論』 医学書院.
- 川端谷津子 (2016) 『通訳の訳出精度に影響を及ぼす SL 要因：中国語から日本語への訳出の場合』 杏林大学国際協力研究科.
- 小松達也 (2005) 『通訳の技術』 研究社.
- 杉藤美代子 (1999) 「ことばのスピード感とは何か」『言語』 28(9), 30-34.
- 張晶 (2018) 『リスク回避の視点から見る中日同時通訳における話速と訳出率の相関関係』 杏林大学国際協力研究科博士論文.
- Gile・Daniel (2012) 『通訳翻訳訓練 基本的概念とモデル』 田辺希久子・中村昌弘・松縄順子 (訳) みすず書房.
- 董海涛 (2019) 『コーパスを利用した逐次通訳と同時通訳の訳出率に関する比較研究：日本語から中国語への訳出を中心に』 杏林大学国際協力研究科博士論文.
- 鳥飼玖美子 (2013) 『よくわかる翻訳通訳学』 ミネルヴァ書房.
- 宮偉 (2024) 「談話レベルから見る機械翻訳 記事の日中翻訳を例に」『城西国際大学大学院紀要』 27, 86-102.

中文文献

- Corbin & Strauss (2008) 朱光明译 (2015) 『质性研究的基础：形成扎根理论的程序与方法』重庆大学出版社。
- 蔡小红·方凡泉 (2003) 「论口译的质量与效果评估」『外语与外语教学』3, 41-45.
- 董燕萍 (2005) 『心理语言学与外语教学』外语教学与研究出版社。
- 江晓丽 (2017) 『口译课堂教学研究』浙江大学出版社。
- 李学兵 (2005) 「口译过程中影响理解的因素及理解能力的培训策略」『外语教学』26(3), 85-89.
- 卢信朝 (2009) 「英汉口译听辨：认知心理模式、技能及教学」『山东外语教育』132, 53-59.
- 鲁忠义·彭聃龄 (2003) 『语篇理解研究』北京语言大学出版社。
- 石荷花·康艳梅 (2023) 「日语专业教材和等级考试的关联性研究——从《新编日语》与国际能力二级、专业四级的语法谈起」『外语教育与应用』140-147.
- 谭晶华·杨诣人 (2017) 「高校日语专业统测的历史回顾与前景展望」『外语测试与教学』2, 17-22.

欧文文献

- Díaz-Galaz, Stephanie, Presentación Padilla, and María Teresa Bajo. "The role of advance preparation in simultaneous interpreting: A comparison of professional interpreters and interpreting students." *Interpreting* 17.1 (2015): 1-25.
- Fantinuoli, Claudio. "Computer-assisted preparation in conference interpreting." *Translation & Interpreting: The International Journal of Translation and Interpreting Research* 9.2 (2017): 24-37.
- Gieshoff, Anne Catherine, and Michaela Albl-Mikasa. "Interpreting accuracy revisited: a refined approach to interpreting performance analysis." *Perspectives* 32.2 (2024): 210-228.
- Kurz, Ingrid. "The use of video-tapes in consecutive and simultaneous interpretation training." *The theoretical and practical aspects of teaching conference interpretation*. Udine: Campanotto Editore, 1989.
- Marrone, Stefano. "Quality: a shared objective." (1993).
- Strekalovskaya, Yulia O. "Preparation for Interpretation: Training vs Professional Practice." *European Proceedings of Social and Behavioural Sciences*.
- Yenkimaleki, Mahmood, and Vincent J. van Heuven. "The effect of memory training on interpretation performance." *International Journal of English Language, Literature and Translation Studies* 3.3 (2016): 79-86.
- Zhao, Nan, Zhenguang G. Cai, and Yanping Dong. "Speech errors in consecutive interpreting: Effects of language proficiency, working memory, and anxiety." *Plos one* 18.10 (2023): e0292718.

(あん しょうへい：江西省江西農業大学 講師 城西国際大学人文科学研究科博士課程  
比較文化専攻 在籍)

**Abstracts**

## **Difficulties in Source Language Comprehension in Consecutive Interpreting by Novice Chinese–Japanese Interpreters: An Analysis Using M-GTA**

**Yan Zhaoping**

This study aims to identify the factors influencing the comprehension process of novice Japanese–Chinese interpreters. Using the Modified Grounded Theory Approach (M-GTA), the analysis revealed that multiple factors—including linguistic, cognitive, operational, and environmental aspects—impede comprehension, with insufficient understanding of discourse coherence emerging as a particularly critical issue. Furthermore, the findings indicate that excessive reliance on note-taking and inadequate allocation of processing capacity often lead to comprehension deficits and errors in interpretation output. From an educational perspective, it is suggested that introductory interpreter training should not be limited to the acquisition of vocabulary and grammar knowledge, but rather should place greater emphasis on fostering discourse coherence comprehension and systematic training in interpreting skills.

**Keywords:** Chinese–Japanese interpreting, source language comprehension, novice interpreters